

令和6年7月26日

三朝町議会議長 吉 田 道 明 様

産業民生常任委員会委員長 能見 貞明

派 遣 結 果 報 告 書

派遣の区分	第3条（1）
派遣者氏名 （全員を記載）	能見貞明、吉村美穂子、石田恭二、松原茂隆、河村明浩
目的 （調査事項）	三朝町議会産業民生常任委員会所管事務調査 ① 徳島県上勝町 ・葉っぱビジネスの仕組みや成功の背景について ・ゼロ・ウェイストの取組みによるゴミ減量化、再資源化について ② 高知県馬路村 ・ゆずをはじめとする地域資源を活かした村おこしについて
目的地	① 徳島県上勝町 ② 高知県馬路村
期間	令和6年7月9日（火）から11日（木）まで
視察又は研修の 成 果	①【徳島県上勝町】 対応して下さった方 ・上勝町 花本 靖 町長 ・合同会社パンゲア 野々山 聡 氏 《葉っぱビジネスの仕組みや成功の背景と今後の課題》 林業や温州みかんの生産によって支えられてきた町の産業が、1981年に異常寒波が町を襲い、みかんの大部分が出荷不可能になる。町が産業危機にあったことで、当時農協職員だった横石知二氏は、地域でできる新しいビジネスについて考える。「つまもの」の需要と地域資源に注目し、1986年に葉っぱビジネス

を行う会社「いろどり」をスタートさせた。

ビジネスの仕組みは、JA が受注・販売・流通を担当し、農家が栽培・出荷を実施。株式会社「いろどり」が市場分析や営業を行い作業分担することで、それぞれの強みを最大限に活かすことができ、地域全体の産業発展につながっている。また、ICT（情報通信技術）導入により各生産者が市場情報や今後の予測を確認できることで、自ら生産量の調整や計画を立てられることが良い。

視察をして感じたことは、地域資源を活用したことで地域経済を活性化させることに成功した事。自分たちのすぐ近くにある環境や物の価値は、なかなか気づきにくいですが、その需要に気づいたことで原価ゼロ円のビジネスを生み出すことができた事。また、葉っぱビジネスの特徴のひとつに、商品が軽量で取り扱いやすく、女性や高齢者でも運営でき、高齢者が活躍し続けることができる事。

本町でも気づいていない地域資源の価値を活かし、何か出来る事はないものかと思った。課題としては、自然状況に左右されることや人口減少による後継者問題である。

《ゼロ・ウェイストの取り組み》

1997 年までは、各家庭で野焼きを行っていた。できるだけごみを減らしリサイクルを行うため、ごみの 35 分別を始める。ごみを処理するのではなく、ごみを出さない日本初のゼロ・ウェイスト宣言を 2003 年行う。

2020 年にオープンしたゼロ・ウェイストセンターは、町民が自らごみを持ち込み分別するゼロ・ウェイストの拠点となる。上勝町のごみ分別は 13 種類、45 分別。細かく分別することで、焼却、埋め立てごみから資源を救い、処理量も大幅に抑えることができる。リサイクル率は 80%。

今後の課題は、残る 20%はどうするか？ 分別の手間をどうやって減らすか？ ということで、町とパートナーになって持続可能な社会を目指してくれる自治体、団体、企業との連携を通して様々な課題解決を目指している。

三朝町でも、もう少し細かいごみ分別を通してごみ減量に取り組む必要があると思う。全自動生ごみ処理機やコンポストを使って、家庭で出る生ごみをたい肥として利用することや、たい肥その後、町営の焼却場・焼却炉を建設・導入するも効率の悪さに気づき 2001 年には閉鎖。が必要ない人は、必要な人に無料で提供できる取り組みも参考になった。

②【高知県馬路村】

対応してくださった方

- ・馬路村役場 西岡 喬 地域振興課主幹
- ・馬路村農協 長野 桃太 理事・販売課長
久保 温子 加工販売課販売係

《ゆずを活かした村おこし》

村の暮らしを支えてきた林業が衰退し始めた昭和 38 年頃、本格的なゆず栽培が始まる。馬路村は、山間にあり、村にあるわずかな平地は米作に利用されていたので、ゆず栽培は、山中の小さな平地や、急峻な傾斜地で行なわれていた。ゆずが本来持ち合わせている生育の強さもあり、不便な山中のゆず畑では、ほぼ手を掛けないでほったらかしの栽培だったようである。ごつごつとした見栄えの悪いものだったが、果汁を絞り集めて「ゆのす（ゆず果汁）」、「ゆず酢」から色々な加工品へと姿を変えて全国販売へと広がりを見せるようになる。

ゆず生産農家は 190 戸。馬路村農協による直販方式に力を入れて加工販売で年間売上 28.3 億円。馬路村農協内に独自の加工工場、コールセンターを設置するなど、若い世代や女性の就労にも効果をあげている。産学官連携による新商品の化粧品、健康食品など新たな分野への参画も行う。2001 年からはオーガニックにも取り組むことをきっかけに国外販路にも力を入れている。若い人が田舎のイメージが分かりにくいので、商品のデザインやキャッチコピーにも工夫し努力している。

人口減少問題の取り組みとして、ふるさとワーキングホリデー事業で関係人口増加につなげている。交流人口拡大の取り組みとしては、様々な交流イベントの開催や村の様々な情報発信にも取り組み、人口 800 人程度の村に特別村民の募集には、12,194 人。年間来村者数 2,000 人。観光で村を訪れる人は、年間 61,000 人に及び、村を挙げての努力を感じました。

馬路村の名前が全国に知れ、ゆず加工品が村の振興になったポイントをお聞きしたところ、村民、行政、JA などとの距離が近い。意思決定の速さ。チャンス逃さないという西岡様のお話が心に残りました。

◎この度の視察から、町を活性化させるためには、地域資源の価値を見出す人、人と人のつながり、地域愛、町存続の危機感が重要になると感じました。

以上ご報告申し上げます。

産業民生常任委員会副委員長 吉村 美穂子